

海外派遣事業 実績報告書

所属：複合科学研究科 統計学専攻

氏名：金川元信

海外派遣先国名：イギリス

海外派遣先大学：University College London

海外派遣先大学所属：Gatsby Computational Neuroscience Unit

海外派遣期間：2014年10月19日 - 2014年11月20日

海外派遣先大学について

University College London (UCL) はロンドンの中心部に位置する。私の専門とする機械学習分野における多くの高名な研究者が UCL に在籍している。私が滞在した Gatsby ユニットの、ニューロサイエンスや機械学習における研究・教育を行う、大学院の研究科のような存在である。組織としては小規模であり、滞在した時には教員が4名、ポスドク・学生を合わせて30人程度であった。この規模にもかかわらず、分野を牽引する研究成果を毎年あげており、教員・学生ともに優秀な人が多い。

雰囲気は非常にアットホームだった。毎日15時ぐらいに tea talk という、30分~1時間程度の研究報告ないしは論文紹介のための集まりがあって、メンバーのみんながお菓子を食べながら話を聞く。Talk が終わった後は、雑談したい人は残って、そうでない人は各々の部屋に戻る。この tea talk のおかげでメンバー間の情報共有がなされているようだった。しかし毎日 tea talk あるのは負担が大きいようで、夜遅くまで残って仕事をしている教員や学生も多かった。

海外派遣の準備

受け入れ先教員である Arthur Gretton 准教授とは、今回の滞在以前から交流があり、総研大の派遣事業で滞在したい旨をメールで伝えると、快諾していただいた。その後は受け入れ先の秘書さんと書類のやりとりを行った。書類は向こうの大学にビジターとして滞在するためのものと、イギリスのビザ取得に関するものであった。ビザの取得は非常にストレスフルで、心が折れかかったが、何事も人生経験だと思ふことにして取得までこぎつけた。その甲斐もあって、イギリスへの入国はすんなりいった（イギリスの入国審査は非常に厳しいことで知られている）。また総研大の担当の方とも書類を何度も往復してやりとりして、非常にお世話になった。

海外派遣中の勉学・研究

毎週一度程度、Gretton 准教授とディスカッションを行った。また、ビジターや他のポスドク・学生とディスカッションするときも、研究テーマが比較的近ければディスカッションに混ぜて

くれた。そのおかげで、Gretton 准教授およびその周辺の研究者たちがどのような事に関心を持っているか、また分野で何が流行っているかを知ることができた。これは分野を牽引している外国の研究機関に滞在する大きなメリットである。

滞在期間が比較的短いこともあり、派遣前からこちらで行っていた研究テーマについてディスカッションした。しかし、このテーマとはまた別の研究について論文執筆を行う必要があったため、滞在中に集中的に研究を進められなかったのが悔やまれる。帰国後もメールで連絡を取り合って研究を進めている。

海外派遣中に起こった勉学・研究以外の活動

せっかくイギリスに滞在しているので、週末はいろいろなもの見て回ろうと決めていた。ロンドン市内だけでも見るべきものが非常に多く、いくつか重要な観光地に行きそびれてしまった。行った中では大英博物館やナショナル・ギャラリーの展示物が特に素晴らしく、これらを訪れるだけでロンドンに来る価値はあると思う。またこれら博物館は無料で開放されているため、ロンドンは文化的に恵まれていると感じた。

週末旅行では、ロンドンから西に特急で 2 時間ほどのところに位置する「バース」と「カッスルルーム」を訪れた。バースは Bath と書くが、これは古代ローマの温泉保養地が起源の街であり、古代の温泉の遺跡等を見物した。カッスルルームは中世の町並みを残す小さな村で、2 時間ほどで全て見て回れるほどだが、のんびり過ごした。

海外派遣費用について

海外派遣事業の支援金で、航空チケット（約 20 万円）、住居費（一月半で約 15 万）、海外保険・ビザ関連費用を賄った。住居はロンドン郊外の日本人専用シェアハウスを利用した。ロンドンの物価は非常に高く、また円安ポンド高の影響もあり、何にせよこちらの 2 倍ぐらいする感覚だった。たとえば昼食代は簡単なサンドイッチ等でも 1000 円近くした。また、交通費も意外と馬鹿にならず、電車代で一日 1000 円ぐらいした。

住居に関しては、当初は短期で借りられるアパートを探していたが、ロンドンではまともな値段で借りられるものはなかった。そのためシェア物件を探したが、ロンドン滞在経験のある人に聞いたところ、日本人シェアがおすすめとのことで、日本人が経営するシェアハウスを探して借りた。他のシェア物件に比べて少々割高だが、あまりに安いと治安の面で不安なので、これぐらいでも適当だと思う。また日本人同士で情報交換も行えたりと、色々と便利であった。

海外派遣先での語学状況

派遣先はイギリスであったため、大学においても日常生活においても英語によってコミュニケーションをとった。私は特にリスニングとスピーキングで苦勞した。まずリスニングだが、日常生活では買い物をするとき店員が何を言っているのかよく聞き取れず、頻繁に Sorry? と聞き返した。滞在後半になるとだいたい文脈と雰囲気から分かるようになったが、完全に聞き取れないと確認のために聞き返した。派遣前の1, 2ヶ月程度、リスニングの勉強として Youtube など英語の動画を見たりしたが、それでは不十分であった（派遣前の TOIEC の点数は 850 程度だった）。

大学では相手が早口でなければ、だいたい聞き取れた。苦勞したのはスピーキングで、たとえば何人かでご飯を食べている時に、自然なタイミングで自然なコメントをしたりするのが非常に難しかった（日本語でもあまり得意ではないが）。そうするとだいたい聞き役になるわけだが、たまに誰かが話しを振ってくれたりすると、すごくドキドキする。そしてシドロモドロに答えるわけだが、そういったのが自分としては研究以上に大変だった。研究ではだいたい相手が理解するまで忍耐強く聞いてくれるし、ホワイトボードも使えるので意思疎通が比較的容易だが（あくまで比較的）、日常的な世間話だと会話の流れを追うのに精一杯でとても自分が話すどころではなかった。

しかしやはり研究でもスピーキング能力はまだまだ（かなり）不十分であると感じている。たとえば、研究に関するアイデアを伝える時、日本語ではできる微妙なニュアンスの表現や直感的な説明が、英語になった途端にできなくなる。これは自分の英語の力から言えば当然だが、研究に関するディスカッションの際に非常に不便だった。というのも、日本語だと一文で表現できるような基本的なアイデアが、英語だと長く説明しなければ伝わらない。しかしこういったことに気づくことができたのも、海外派遣で得た大きな収穫だと思う。

海外派遣先で困ったこと

風邪を一度ひいてしまった。それが運悪くも派遣先大学でトークをする直前だったため、風邪で体調の悪い中、夜遅くまでスライドの準備をしたりするのが大変だった。しかし、ロンドン滞在経験のある知人に Strepils というのど飴型の風邪薬（日本では買えない）がよいと聞いていたので、購入してたくさん舐めたらあまり悪化しなかった。海外滞在中は日本にいる時のように気軽に病院には行けないので、これには助かった（もちろん日本からも風邪薬を持っていたが）。

海外派遣を希望する後輩へのアドバイス

上で書いたように、日本人シェアハウスも風邪薬も、ロンドン滞在経験のある知人に教えても

らっていたことが功を奏した。私のおすすめは、もし身近にこれから滞在予定の場所に滞在した経験がある人がいれば、いろいろと現地の生活の知恵を教えてもらうことである。もしいなければ、インターネット等を使って事前の下調べをしておくことである。これだけでもだいぶ滞在前の不安を和らげることができるし、いざ何かあったときにも多少心構えができる。また英語は、余裕があればトレーニングを積んでおくことをおすすめする。私のように多少できなくても日常生活に不便はないが、やはりできるとコミュニケーションがより楽しめると思う。



大学の近くの公園。ロンドンはいった緑豊かな公園が至る所にあるのが非常に良い。



ベンチにはこういった事が書いてある。



ロンドンの都心部の様子



週末旅行で行った、カッスル・クームの村